

ともに生きるという「資源管理」—小川原湖シジミ漁の漁業活動の過程から見た人間—
環境関係の考察—

松本眞言

キーワード：漁業、資源管理、マルチスピーシーズ、世界制作、ともに生きる

要旨

本研究は水産資源利用・管理に関する研究である。

序論では研究設問と目的を提示した。

資源管理において、人間の活動を制限するものの他に、人間と環境相互の関係で場を作り上げることを目指すものがあり、そこでは人間と自然(環境)を切り離すことが目的ではない。そのような意味で、資源管理は人間から始まる行為であるが、人間だけの方法を評価・提案することでは、人間だけではない世界であることに気が付けないと言えよう。そこで本研究は資源管理型漁業であるシジミ漁から、人間とシジミを中心とした他のモノたちとの関係がどのように結ばれているのか研究した。そして、人間の活動がいかに他のモノとの協働で成り立っていると言えるのか描き、資源とはなにか、資源管理するのは誰なのか、人間だけでない世界で生きるとはどのような実践なのか考察することを目的とした。資源管理・利用という活動をこれからの地球でいかに行い得るのか、言い換えるならば、人間だけでない世界で生きるということの可能性の1つを提示する。

第二章では、漁業研究に関して資源管理の研究と「資源以上」の研究の異なりを示し、マルチスピーシーズ民族誌と生態人類学の研究を比較検討した。

第三章では、研究対象である小川原湖開発や、漁業の特徴、シジミ漁の特徴、調査手法・期間について述べた。

第四章では、シジミ漁のうち、「シジミをとる」活動がなぜ面白いと言われうるのか、人間と他のモノたちの関係性から探り、シジミ漁の面白さとは、漁師が小川原湖とともに成長し続け、絶え間なく変化する関係性に没入している点にあると指摘した。

第五章では、シジミに商品価値がつくときの基準と、商品価値がなくなるときを検討し、商品であるシジミとは、シジミの含む関係性が単純化されており、商品価値がなくなるといことはシジミのもつ他のモノとの関係性が再び表出するということを明らかにした。

第六章では、シジミの管理活動をめぐり、人々の活動は積極的に自然・シジミをコント

ロールするのではなく、シジミの生が結びつく可能性を高めながら待つことであるという
ことを示した。

第七章は、資源、資源管理をするもの、人間だけでない世界で生きるという実践を考察
した。資源とは、商品価値がつくようになるのは「シジミ」という単体的な、関係性の
単純化されるものだが、そこには単純化されているだけで「シジミ-小川原湖」という
関係性が含まれているのである。また、資源管理を行なうのは、人間であるが、それは
むしろ人間以外のモノたちのリズムに沿って行われている。そして、以上のような人間
だけではない世界で生きる実践を小川原湖の活動から見てみると、それは理解できない
力などの余白を認め、それとともに世界を作りつづけることなのである。